

# 日常の裏側

金科玉条

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

とくにコレと言った線もなく、ただただ書いてみたくなっただけです…

# 目次

日常の裏側

---

1



# 日常の裏側

もう嫌だなあ…

そうやって、夕暮れ時の坂道、つま先で地面を蹴り蹴り歩く。

みんな、私をいじめるんだ…

苛める、という言葉の意味を知ったのは、本当につい最近のことだった。

友達——と呼んでいた存在も、先生も、お母さんでさえも。

お母さんはもういない…

ううん、いるけど。

昔のお母さんは、車にぶつかってしんじやった。

お父さんは嬉しそうに、新しいお母さんを見つけてきて。

お父さんも…しんじやった。

——お母さんは、私を嫌い。

私は、お母さんが好きなのに、お母さんは私が嫌い。

なんでだろ…

考えても、わからないや。

また少しずつ坂を下り、夕日を受けて伸びる影を眺める。  
遊びたいなあ…

最近、遊んでない。遊ぶ相手がないのだから、至極当然と言えばそうんだけど。  
小学2年生の身に、それは確かに辛いことであつた。

遊びたいな…

また、同じ事をうだうだと考えながら、帰りたくない家へ、帰っていく。

かくれんぼ、鬼ごっこ、キャッチボール…

いずれもいずれも、独りではできない遊びだった。

誰か遊んでくれないかな…

…無理だよね…

なんて、呟き。

「あそぼ」

誰かの声が、空しく響いて。

「寂しいんでしょう？あそぼうよ」

私は、夕暮れの坂を振り返る。男の子が一人、立っていた。

大きな口を開けて、歯をむき出して、にこつと笑う。

「ぼくと、あそんでよ」

誰だろう、とか、なんで、とか、思う間もなく。私は、その子の手を取って、駆け出していった。

——楽しい。

私は、ずつと、その子と遊んでいた。

できないあそびなんてなかった：その男の子は、たくさんの遊びを知っていた。夕暮れは通りすぎて、時間は流れを止めていく。

屈託のない笑顔と、否応なしに過ぎて行く遊びだけが、私の頭を塗り替えていく。

おんなじ遊びでも、彼となら楽しかった。

何度も何度も遊んで、覚えていった。

帰りたくないおうちになんて、帰らない。

遊びたいのに、遊ばないなんて、ありえない。

私はずつと：こうやって、遊びたかったんだ。

それでも。

気がつくと、私はひとりぼっちだった。

彼の姿はどこにもなくて——ただ、どこかで見たような夕暮れの坂道だけが、私の目の前に伸びている。

…唐突に。

私は理解した——世界の意味を。

私の体験したことの、意味を。

「うふふ…♪」

楽しかった。

独りなのに、すごくすごく、楽しかった。

わかっていた…この先に、何があるのか。

坂を下りきって、公園に入る。

小さな女の子が、泣いていた。

寂しいんだ——かつての自分のように。

そんな子を、救ってあげなきゃいけない…恩返しのため。

「ねえ、あそぼ？」

私は、問いかける。

「寂しいんでしょう？あそぼうよ」

大きく口をあけて、にっこりと笑う。

歯もむき出して、にっこりと笑う。

敵意もなく、にっこりと笑う。



ただただ、にっこりと笑う。

だって：遊ぶのは、楽しいから。

時に我を忘れて、全てを委ねてしまう程に。

それが、私の、世界なの。

小さな、世界。

ちよつとずつ広がっていく、私の世界——

引きずり込まれた世界は、私のものじゃないのかもしれない。

けれど、遊んでいる間は——確かに、確信を持って、私の世界であると言い切れる。

だから——

あそぼ？